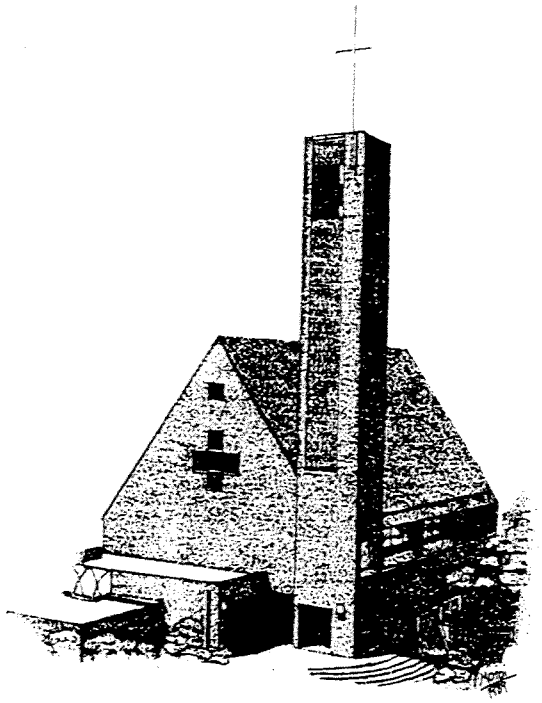
チャペル ブックレット No.8

―― 1994 宗教講演記録 ――

主の愛 この眼にありて

名古屋大学
武岡洋治 教授



名古屋学院大学　宗教部

講演中の武岡洋治教授

1937年三重県生まれ。
名古屋大学大学院農学研究科博士課程修了。研究テーマは、実験形態発生学を基礎に、高等植物の発育と形質の発現、特にイネにおけるその発生と発現の変化など。
現在、名古屋大学農学部教授。
農学博士。

サヘルの地平線に沈む夕日

帰途を急ぐセナールへの道　真っ赤な夕日に脇目をふりつつ
駆ける自動車の高鳴りも耳に響きて

1992年9月4日、セナールへの途中で、
病に倒れる前に撮影した最後の写真

この名古屋学院大学は私の大好きな大学です。その理由はチャペルがあるからです。キャンパスを歩いていてふと見上げると、木々の間からチャペルの十字架が見える……。そして鐘の音が聞こえてくる……。私はこの光景にやすらぎを感じ、また励まされます。このキャンパスで勉学に励んでおられるみなさんをたいへん羨ましいとさえ思うほどです。

今日、みなさんにお話をする機会をいただき、大変うれしく思い、この機会を作ってくださった梶原先生、大西先生はじめみなさまに感謝しています。

われ、生くるにあらず

私は今日の話の題を「主の愛この眼にありて」としました。

新約聖書ガラテヤの信徒への手紙２章20節でパウロは、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」と言っています。私の好きな文語訳聖書によれば、この最初の部分は「最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」となっています。私のような年齢の者には、この方が好きというばかりでなく、わかりやすいような気さえしま

す。
　つまりパウロは、「今までの私はもう死んでしまった。今生きているのはキリストが、主の愛が私のなかにあって生きているのだ」と、ガラテヤの人々に書き送った手紙のなかで述べているのです。

わが眼、生くるにあらず

　私の右眼はもう死んでしまいました。一昨年のことです。かろうじて左の眼は生きておりますが、視力は 0.1です。ここからみなさんの顔はうすぼんやりしています。目鼻だちはぜんぜん分かりません。一番前にすわっている女子学生が美人か美人じゃないかも判りません。（注：この学生は男性でした）
　お配りいたしました資料に「われ見るにあらず。キリストわれにありて見ゆるなり」と書きましたが、かろうじて見ることのできるこの眼は、私の眼でありながら、私が自分の力で見ているのではなく、主の愛が私のなかにあって、私は見ることができるのです。これが私が今日みなさんにお伝えたいと思っている中心的テーマです。
　こうしてわずかだけれども見えるのは、キリストが見せてくれるから見えるのだということ、そしてそれは大きな喜びであるということを、どうしてもみなさんにお伝えしたいと思ってまいりました。

　こう言ってしまえば私の話は終わったも同然です。ではさようならと講壇を降りてもいいのですが、まだ持ち時間がありますので、与えられた時間、私のこの悲惨にして素晴らしい経験をお話ししたいと思います。

遙かなる旅路の果てに

　お配りしました資料をごらんください。この文章の「遙かなる旅路の果てに」という題は、私がこの経験をノートに書きためておいたものを、このたび出版されることになりました。これはその本の題でもあります。

「遙かなる旅路の果てに」

遙かなる旅路、それは、
サヘル三千キロ、砂漠化調査の旅
病に倒れた現地での入院闘病の旅。
不治と言われ、失明に追いこまれた
　帰国後の入院闘病の旅。
視死回生を求め、
角膜移植を受けた今日までの旅。

それはまた、
暑く乾いた旅、蚊帳を被って野宿した
　旅でもあった。
副作用薬害、死と隣り合わせた旅。
視死への道のりをたどる

厳しい旅でもあった。

凝縮された時間。
不安と恐怖にさいなまれた日々。
自殺だけはしないでくださいと言った、
看護婦の言葉が頭をよぎる。

それは同時にまた、
命を救われ、支えられて生きた
確かな足どりの旅であった。

生きてあれ。
眼はたとえ見え難くとも、
人の愛この身に宿るを
知ればこそ。

これからも続く闘病の旅。
果てなき道のりの彼方に
望み見るものは何か。

視死回生へのあくなき希望。
副作用薬害の再発防止。
視覚情報学への参与。

われは見るにあらず。
主の愛この眼にありて見ゆるなり。

失明、それは暗黒。
されど愛はそれを癒す。

恵みの光は
わが行き悩む闇路を照らす。

見える喜び空を舞い、
眼を病む人の苦しみを思う。

神は愛なり
人はパンのみにて生くるにあらず。

人生に絶対の暗黒はない。

1994.4.29.編

絶対暗黒の世界

いま私は心底から「人生に絶対の暗黒はない」という言葉をかみしめています。一時は失意のどん底に落とされました。ほんとうに真っ暗でした。しかし今ふりかえって見ますと、そんな時でさえも「絶対の暗黒」ではなかったと確信せざるをえません。

絶対の暗黒とはどんな暗黒でしょうか。それは他との一切の関係を絶ってしまっているということです。絶対のひとりぼっち、絶対の孤独、これほどの恐ろしい暗黒はありません。

私が体験した、眼が見えなくなるということ、今まで見えていたものが見えなくなる……、これは確かに暗黒です。恐ろしい不安です。もちろんどなたでも同じでしょうが、

特に私は顕微鏡を一番大切な研究の手段としてきた研究者でしたから、その私にとって顕微鏡を覗けなくなるということはほんとうに残酷なことでした。どうしたらよいだろうかと気が狂いそうでした。

しかしそのような時にあっても絶対の暗黒 —— 他とのあらゆる関係を絶ってしまうという、絶対の暗黒ではありませんでした。私は遠い外国でそのような状態でひとりでいた時でさえも、ひとりぼっちではなかったからです。私には家族がありました。私には親しい友人がいました。私には治療に当たってくれた医師と看護婦がいました。私には同じ病室で語り合った同病の友がいました。

その人と人のつながりのなかで、いやそのつながりがあったから、私はそれに励まされて、かろうじて立ち直ることができました。そしてまたそれによって私は生きていく希望を与えられたのです。

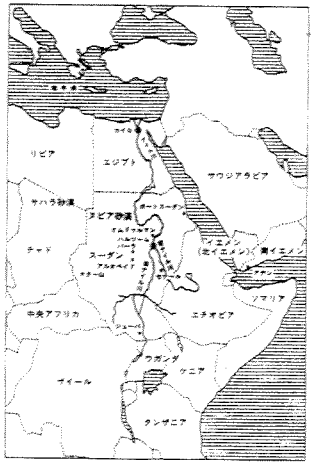
希望を与えられたというのは、決してただの思い込みではありません。今回のアフリカでの体験によって、ほんとうにはっきりと実感したのです。

アフリカ・スーダン・サヘル

それでは私が実感するに至ったその体験をお話しいたしましょう。地図をごらんください。アフリカの地図は人間が右を向いている

顔に似ています。スーダンはたいへん広い国で、面積は日本の約8倍、250万㎢で、アフリカで一番大きな国です。またスーダンはたいへん古い歴史を持っています。みなさんは高校の世界史で勉強したと思いますが、大抵の教科書には「アフリカで一番古い農業の歴史を持った国は、ナイル河の下流エジプトである」と書いてあります。しかし研究者によれば、もっとも古いアフリカ土着の農業はエジプトではなく、このスーダンで始まっているのです。

アフリカにはサハラ砂漠があります。この「サハラ」という言葉は草木が一本も生えない土地、不毛の地という意味です。このサハラの南、スーダンから西の方に西海岸に向かって、北緯14度上に長く延びた帯状の地帯、そこをサヘルといいます。この「サヘル」という言葉は「岸辺、波うちぎわ」という意味です。この名前の由来は、サハラ砂漠の南は雨期になりますと草がはえて緑になります。ところがいったん乾期になりますと、カラカラに乾いて草は一本もなくなり、草のあるところはだんだん南に下がっていきます。また雨の季節がやってきますと、緑はずっと北に上がっていきます。季節によって緑の場所が南へ北へと動くのです。それがちょうど寄せては返し、寄せては返しする波に似ているというわけで、この地帯を波うちぎわ —— サヘルというのです。



砂漠化調査

ところがこのサヘルも 100年くらいの間に次第に雨期にも雨が降らなくなって、乾燥してしまいました。そして作物が採れなくなってしまいました。干ばつです。

最近、日本でも長い雨が続いて、イネが実らず、米が穫れないという冷害がありました。そのため世界各国から米を買い集め、大騒ぎをしましたね。

1968年から1973年にかけてこのサヘルでは、歴史が始まって以来の大干ばつが起こったと世界中に報道されました。飢えと渇きのためにその年だけで数十万人の人間が死に、一千万頭以上の家畜が死にました。

ここの干ばつはただ渇くだけではないのです。サハラ砂漠を控えていますので、風が吹くと砂煙がもうもうと立ち上がり、その砂塵によって畑がみんな砂に埋もれてしまうのです。井戸はみんな干上がり、畑は砂丘になってしまうのです。そんな状態が数年続きました。

そして今もサヘルでは、乾燥による深刻な害が続いています。とにかく食料が全くなくなってしまったのです。たくさんの人々の餓死も続いています。そして大勢の人々が干ばつの土地を捨てて都会へ出ていきました。

スーダンの首都はハルツームです。みなさんはハルツームは知らなくてもナイル河は知

っていると思います。教科書風に言えば ——— ナイル河はエジプトのデルタ地帯にたくさんのよく肥えた土を運んできて、そこでは米がたくさん穫れる。そこに古代エジプト文明が花開いた ——— ということですね。そしていま朝日新聞の日曜版に連載されているクレオパトラの登場となるのです。そのナイル河を遡っていくと、ハルツームに出ます。ハルツームを過ぎるとナイル河はふたつに分かれ、ひとつは青ナイル、もうひとつは白ナイルとよばれています。反対からみれば、青ナイルと白ナイルの合流点がハルツームというわけです。「ハルツーム」というのは橋という意味です。

そのハルツームに80万とも 100万ともいわれる難民が押し寄せてきています。干ばつのために畑を捨て、家を捨てて都会へ逃れてきたのです。

1972年ストックホルムで「人間環境会議」が開かれ、サヘルの砂漠化が討議されています。1977年に国連では「国連砂漠化会議」が開かれ、世界各国の専門家の間でその防止策が話し合われました。1992年リオ・デ・ジャネイロで21世紀に向けての開発会議が開かれ、そこでも砂漠化防止のための条約が採択されました。

私たちはこの砂漠化の調査に現地に出かけたのです。予定は三週間でした。1992年の 8月22日、日本では暑い夏の盛りが少し過ぎた頃のことでした。

想像を絶する暑さ、渇き

砂漠化という言葉はよく聞きます。日本は今ちょうど梅雨時でしめっぽく、蒸し暑い日が続いています。日本にいると砂漠の暑さ、渇きというものは決してわかりません。日本の真夏の暑さとは異質の暑さなのです。

私もスーダンに行くまでは勝手な想像はしていましたが、想像していたものと実際行ってみたのとはまるで違うものでした。日本人には絶対に想像できないものです。

この時期、スーダンは夏の終わりで、まだ雨期でした。雨期という言葉からは考えられないほど、雨は少なく、年間雨量が 100㎜以下です。名古屋は1500㎜位ですから、15分の1です。

私が行った時、朝7時で35℃、湿度40％と針が示しています。しばらくするとぐんぐん温度は上がり、そして40℃を超え、午後2時には43℃までいきます。体温よりはるかに高いのです。それだけではなく、湿度が20％を下まわるのです。暑いという感覚ではなく、それを通り越し、頭がボーッとしてきます。

スーダンの人々はそうなると、窓という窓をぴったり閉め、カーテンも引いて、その部屋のなかでじっとしています。小さな子どもはオリーブ油を体に塗ります。そうしないと体から水分が逃げてしまって、脱水症状になるからです。

そのなかで私たち五人 —— 私と同僚の竹谷裕之教授、スーダンの共同研究者のイサム氏、助手二人 —— の五人は、サヘルの砂漠地帯をレンタカーで走り続けました。

発　病

名古屋を出て二週間めのある日のことでした。セナールいうところで私は自分の身体に異常を感じました。40℃以上のところを走り回っていたのですから、最初は少々バテたのかなと思いました。しかしそれから身体の上半身に赤い発疹が出てきました。口のなかがひどく荒れてきました。それでてっきりアフリカの風土病に罹ったのかと思いました。

セナールは、名前は現地語で緑の地という意味ですが、実際は半砂漠のなかで、病院はおろか医者もあまりいません。

道中トラックの上で蚊帳を被って寝ましたので、蚊にもずいぶん刺されました。ですから、さてはマラリアに罹ったかなとも思い、マラリアの予防のために持っていった薬を飲みました。しかしどんどん悪くなるばかりです。

同僚たちは調査を中止して、私のために急いでハルツームへもどってくれました。全速力で走るのですが、なにしろ30分走れば30分休ませなければならないようなエンジンの貨物トラックなのです。やっとの思いでハルツ

ームへもどったときは、私はほとんど失神状態でした。

翌日、いろいろな方の手立てでやっと病院で診察を受けたところ、即座に「スティーブンス・ジョンソン症候群」という名前の病気と診断されました。薬によるアレルギーが起こったのです。私はそれまで薬などでアレルギーを起こしたことはありませんでしたので信じられませんでした。

この病気は粘膜がやられるのです。そのうち目が見えにくくなってきました。身体中が火傷を負ったように赤くただれてしまいました。足の爪は全部はがれてしまいました。足の裏はぶよぶよです。女性の方々には言いにくいのですが、性器も赤くただれてしまいました。口のなかはもちろん、喉も、鼻のなかも、柔らかいところは全部やられてしまいました。食べるものは固形物はもちろんジュースなども痛くて口には入りません。激しい下痢が続きましたが、病院のトイレには紙がありません。左手で水をすくい、お尻を洗うのです。これはアラブの人たちの生活習慣ですが、トイレットペーパーを使うことに慣れてきた私にはこれもまた難しいことでした。

私は日毎に痩せていきました。大変なことになったというよりは、何が何だかわからないという状態でした。

病気にならないようにと買い求めて飲んだ薬「ファルシダール」が、恐ろしい副作用を起こしたのです。

それから私は意外なことを聞きました。ハルツームの大学病院の医者と、私を診てくれたアメリカ大使館のアメリカ人の医者は、「この薬ファルシダールは1983年に WHO（世界保健機構）でマラリアの予防薬として認められたが、その後たいへん重い副作用がでるということがわかり、 WHOは1988年にリストからはずしたはずだ」と言うのです。どうしてそんな薬が日本で売られているのでしょうか。

日本での治療

9月25日、私は車椅子に乗せられて日本へ帰ってきました。13kgも痩せ、変わり果てた私をみて、成田まで迎えにきた妻は言葉もありませんでした。ただお互い涙ぐんで手を握り合っただけでした。遠い外国で夫が病気になり、看病にも行けず、情報の少ないなかで待ち続けた妻の心痛は、私の苦痛をはるかに超えていたかもしれません。

すぐに名大病院の分院に入院して、皮膚科と眼科の治療を受けることになりました。ところが、日本の医者は私を診て、「残念だけれど、このスティーブンス・ジョンソン症候群という病気には、これといった治療法はありません。」と宣告したのです。やがて私の眼は、少しずつ幕で覆われるように、全くと言っていいほど見えなくなりました。

医師から「このままほおっておけば、潰瘍で眼に穴があいてしまう。それを防ぐためには角膜移植の手術しかない」と言われ、京都の病院を紹介されました。

10月30日に転院し、11月10日夜中すぎに、角膜を提供してくださる方があって移植手術をしていただきました。

幸いだったことに、テスト中だった拒絶反応をおさえる薬があって、それを使っていただき、手術は一応成功したのです。と言うのはスティーブンス・ジョンソン症候群が原因で行う角膜移植手術は術後の拒絶反応がひどくて、それまでなかなか成功しなかったのだそうです。私にしても医師にしてもその新薬を使うことは一種の賭のようなものでした。さきほど「一応」と言ったのは、今のところまだ拒絶反応がでていないということで、これからのことはわかりません。これからもこのままいけばいいと願っています。

神が私にしてくださったこと

この眼は一度見えなくなりました。死んでしまったのです。けれども角膜を提供してくださった方、そしてその手術をしてくださった医師、そして祈ってくださった多くの人々によって再び光をとりもどしました。私はそれらの人々が神さまからの救いのみ手であったと、固く信じています。

この２年たらずの間をふりかえってみますと、別れ道、岐路にさしかかったとき、いつも、確かに、神さまが私にとってかけがえのない人を置いてくださっていました。ほんとうに大きなこの恵みを痛感しています。

その一人にハルツームの病院の看護婦の藤井さんという方がおられます。青年海外協力隊員として働いておられました。あの状態の私にとって、日本語で世話をしていただいたということは何にも代えられない幸せなことでした。そのうえ現地ではガーゼもない、包帯もない、まして注射器などはほんとうに貴重なものでした。そのなかで藤井さんが手持ちのそれらを提供してくださったのです。

スティーブンス・ジョンソン症候群という病気は95％が死ぬと言われていますが、その最期は鼻クソによる鼻づまりです。身体中の粘膜が侵されるのですから、口のなかにも大きな水ぶくれがたくさんできて喉を詰まらせ、最後は窒息死です。見えない眼を大きく開き、苦しみもがいて死ぬそうです。これも私の病気が峠を越してから藤井さんが私に教えてくれました。

苦しみのなかから

さて、みなさんはまだ若いのです。この先どんな人生を歩まれるのでしょう。順調な間はいいのですが、何が起こるかはわかりませ

ん。何かにつまずいてしまうかもしれません。そしてそれが厳しければ厳しいほど「どうしてこんなことが」と悩み、苦しむでしょう。

そしてあなたが友人からも家族からも見放され、ひとりぼっちになってしまったと感じるとき、そしてもう死んでしまいたいと思ったそのとき、あなたはこのチャペルの見えるキャンパスで学生生活を送ったことをどうぞ思い出してください。緑の樹の間に見える十字架を思い出してください。チャペルで聞いた何か一言でも思い起こしてください。きっと大きなやすらぎを覚えることでしょう。きっとそこから生きていく勇気のようなものを与えられることでしょう。

私は失明するかもしれない、顕微鏡が覗けなくなって、研究者としての生命が絶たれることになるかもしれないと思ったときにも、私には家族がいました。励ましてくれる友人がいました。真剣に病気と取り組んでくれる医師が、看護婦がいました。

そして、それらのすべての人々をわたしのそばにおいてくださった神さまがいました。ですから絶対の暗黒の世界に足を踏み入れることはなかったのです。

「主が共にいて下さる。」これを信じる人間には、絶対の孤独、絶対の闇はないのです。

スーダンにミルクを

要所要所で私はかけがえのない人々を与えられ、その人々によってかろうじて死ぬこと、失明することからまぬがれました。

私はここでみなさんに心をこめてお願いいたします。いま私は遙かなる旅路をもどってきました。その軌跡を記した『遙かなる旅路の果てに』という本が近々出版されます。私の自費出版で、1500部印刷して、そのうち1000部を私が引き取る約束です。この1000冊の代金を粉ミルクに換えようと思うのです。もし1000冊全部売れたとすれば 150万円です。そのうち諸経費を引いて、うまくいけば 100万円の粉ミルクになるという計算です。それをスーダンへ送ろうと思うのです。

私はあの病院でカップ一杯のミルクにどれだけ助けられたでしょうか。私があのときミルクをいただいたために、それをいただくことができなかったスーダンの人がいます。

スーダンの人は Poor but honest、貧しいが正直だと言った、友人の眼差しを思い出します。

どうぞこの働きをみなさんで助けていただきたいと心から思います。

闇の中の光

闇、真っ暗闇。私はいま、あの闇を思い出しています。遠いスーダンの病院で、ひとりベッドに横たわり「いつになったら日本へ帰

ることができるのだろう、もう帰ることはできないのかもしれない」と思い続けた日々。また「もうこのまま見えなくなるかもしれない、もうすぐ死んでしまうのかもしれない」という不安と闘った日々。特に夜になると、その不安はつのり、「明日も生かしてください」と祈りました。そして朝がくると「今日の命をありがとうございます」と感謝の祈りをささげました。

こんな日々、ある夜中に赤ちゃんの産声で目を覚ましたのです。目は見えず、全身に包帯をまかれて、一歩二歩、歩くことがやっとの状態でしたが、私はその泣き声に導かれるように、部屋を出て廊下に佇みました。そして真っ暗闇のなかで私はその赤ちゃんの泣き声を聞いていました。

そのとき突然、私にこんな思いが湧いてきました。「もし自分がこの地で死んでしまっても、この命はあの赤ん坊のなかに宿るに違いない」と。

熱いものがこみあげてきて、全身が震えるようでした。涙の出ない眼でしたが、心に熱いものを覚えました。元気な赤ちゃんの産声で、自分の死を受け入れるようにと、神からの示しと導きを受けたのです。

私の心は平安でした。

夜があけて、看護婦からその夜ふたりの赤ちゃんが生まれたことを教えられました。あの夜を境にして、わたしの身体も次第に快方へと向かっていきました。

真っ暗闇のなか ——— ほんとうに真っ暗でした。深夜の暗闇のなか、また私自身ももう一生光を見ることはないのかもしれない。それどころか、生命さえどうなるかわからない。そんな真っ暗闇のなか ——— 突然、響いてきた元気な赤ちゃんの産声、それは小さいけれど確かな存在として輝いていました。まさに「光」でした。見えないはずの私の眼はその光をはっきりととらえていたのです。それを、いま、私は、あざやかに思い出しています。

癒しがたい後遺症を負ったこの眼にこそキリストの愛が宿った。 —— その幸いを思わずにはいられません。

'94 宗教講演会 PartⅡ

「主の愛、この眼にありて」

名古屋大学教授　武岡洋治 氏

武岡先生（名古屋大学農学部）はスーダンへの出張の際のマラリア薬禍によって発病、一時は生命が危ぶまれ、その結果ほとんど失明状態になられました。研究者生命を絶たれるかもしれないという恐怖、また完全に視力を失うことになるかもしれないという最悪の状態のなかで、ご自身の手記を書かれました。不自由な目で拡大鏡を使い、ノートに顔をつけるようにしての執筆でした。そこには同じ苦しみが二度と繰り返されないようにという願いが込められていました。そこでは薬害について、視覚障害者が望んでいることについて、また行政の立ち遅れなどにも言及しておられます。

その最悪の状態から立ち直られた先生に、恐るべき、また貴重な経験をうかがい、私たちが生きていく道をしめしていただきます。

6月27日（月）13：35

B－2 教室

名古屋学院大学宗教部

名古屋学院大学キリスト教センター　☎ 0561-42-0348

チャペル　ブックレット　発刊にあたって

本学の開学（1964年）以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペル　ブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長　梶　原　　寿

チャペルブックレット

●既刊

No.1　経済の論理と人間の論理
　エコノミック　アニマル日本
　　恵泉女学園大学教授　塩沢　美代子

No.2　心を問い続けて
　　北海道家庭学校校長　谷　　昌　恒

No.3　国際化時代におけるキリスト教の使命
　韓国の視点から
　　梨花女子大学教授　徐　　洸　善

No.4　激動する現代史と神のみことば
　　東京女子大学教授　池　　明　観

No.5　生きることの感動
　　豊島岡教会牧師　金　　纓

No.6　生きるよろこび
　　フリーアナウンサー　村田　佳寿子

No.7　心を支えているもの
　　西片町教会牧師　山　本　将　信

No.8　主の愛この眼にありて
　　名古屋大学教授　武　岡　洋　治

チャペルブックレットNo.8

１９９５年３月31日発行

編集・発行　名古屋学院大学　宗教部
〒４８０－１２
瀬戸市上品野町１３５０
TEL ０５６１－４２－０３４８

印　　刷　泰光株式会社